2019年7月14日（日）「目をさましていなさい」

マタイ 24:36-44

36 ただし、その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。 37 人の子が来るのは、ちょうど、ノアの日のようだからです。 38 洪水前の日々は、ノアが箱舟に入るその日まで、人々は、飲んだり、食べたり、めとったり、とついだりしていました。 39 そして、洪水が来てすべての物をさらってしまうまで、彼らはわからなかったのです。人の子が来るのも、そのとおりです。 40 そのとき、畑にふたりいると、ひとりは取られ、ひとりは残されます。 41 ふたりの女が臼をひいていると、ひとりは取られ、ひとりは残されます。 42 だから、目をさましていなさい。あなたがたは、自分の主がいつ来られるか、知らないからです。 43 しかし、このことは知っておきなさい。家の主人は、どろぼうが夜の何時に来ると知っていたら、目を見張っていたでしょうし、また、おめおめと自分の家に押し入られはしなかったでしょう。 44 だから、あなたがたも用心していなさい。なぜなら、人の子は、思いがけない時に来るのですから。

【序論】

1995 年に出版された『レフトビハインド』という小説がありますが、この本は全米で 6,500 万部の売り上げとなりました。ティム・ラヘイという、ディスペンセーション主義の立場に立つ作家による作品で、キリストの再臨を描こうとしたものです。

ディスペンセーション主義というのは、19 世紀にイギリスで発祥し、アメリカに拡大した独特の終末思想で、その大きな特徴として、旧約聖書の預言を文字通りに捉え、イスラエルと教会を分離する考え方をもちます。終わりの日に、イスラエルは「地上的神権政治的存在」として審かれ、教会は「霊的普遍的存在」として救われると。だから、主イエスの再臨によって両者は決定的に分離されると考えるのです。世の終わりの患難の前に、教会（に属する人々）は天に引き上げられ、難を逃れる（患難期前携挙説）。聖徒たちは一瞬にして地上から姿を消し、信じなかった人々は地上に残され、患難期を苦しみながら過ごしていく。そして、患難期が終わった時に、キリストは聖徒たちを引き連れてもう一度世に現れ、彼らと共に千年の間地を支配すると考えます（千年期前再臨説）。

『レフトビハインド』は 2014 年に映画化され、ニコラス・ケイジが主演を務めています（鑑賞を推奨しているわけではありません）。「スリラー映画」と評されるように、何か恐怖心ばかりが残る作品です。突然隣にいた人が服だけを残して姿を消し、残され

た人々は大パニックに陥る。そして、この世の倫理・秩序が崩壊する。日本の福音派の中にもこの立場に立っている人は結構います。

私自身は（ディスペンセーション主義の対局にある）契約神学の立場を採っており、神はイスラエルとの契約を尚も保持し、主イエスにおける新しい契約において完成するものと理解しています。また、これまでマタイ 24 章から学んできた文脈で考えますと、キリスト者も患難を通らなくてはならないでしょう。終末論の解釈には様々な立場があるのですが、それでも共通したポイントがあります。それは、「再臨に備えて生きよ」という教えです。今日の箇所はまさしくそのことを伝えているでしょう。

【本論】

ただし、その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。（24:36）

「**その日、その時**」とは、主イエスの再臨の時を表します。主は、その日にご自分が世を審くために来られることを承知しているのですが、それがいつであるかは知らされていないと言われます。御使いも知らない。ただ父なる神様だけがご存知であると。主イエスは知ることもできるのかも知れませんが、敢えて知ろうとされない。終末の全権を父なる神様に委ねておられるということでしょう。ここでは暗に「だから知ろうとするな」というメッセージが語られているように思われます。そして、「誰も知らないのだから、その日に備えていなさい」というメッセージも含まれているでしょう。「備えていること」の重要性を教えるために、主は三つの譬を語られます。

①洪水
②二人の人
③泥棒

<u>本論１．洪水の譬</u>

人の子が来るのは、ちょうど、ノアの日のようだからです。洪水前の日々は、ノアが箱舟に入るその日まで、人々は、飲んだり、食べたり、めとったり、とついだりしていました。そして、洪水が来てすべての物をさらってしまうまで、彼らはわからなかったのです。人の子が来るのも、そのとおりです。（24:36-39）

主は第一に、「ノアの洪水」を引き合いに、再臨の日の突然性を説明されます。創世記６～９章に描かれているノア時代の大洪水は、堕落した人類への審きとしてもたらされ

たものとされています。40 日 40 夜という絶え間ない豪雨によって、地は水に飲み尽くされてしまう。その日に備えて、神の命に従って箱舟をせっせとこしらえていたノア一家とそこに入れられた動物たちは救われた。ここで重要なことは、人々がこの審きの到来を信じなかったということです。巨大な箱舟の建設には恐らく何年もの歳月が費やされたことでしょう。しかし、そのようなノアの行動を見ても、人々は我が事として捉えることができなかった。ノアも黙って箱舟を作っていた訳ではないでしょう。何の目的でこんなことをしているのかと尋ねられれば、神の審きに備えるためだと答えたはずです。そして、「あなたがたもこの箱舟が完成した暁には、中に入りなさい」と再三再四伝えてきたはずです。しかし、人々は信じなかった。彼の行動を笑い、高みの見物をきめこんだのです。しかし、果たして洪水はやってきました。安穏と暮らしていたところに突如として訪れたのです。

「**飲んだり、食べたり、めとったり、とついだり**」という表現は、如何にも当時の人々が暢気に暮らしているような印象を受けますが、よくよく考えてみますと、これらは私たちにとっての普通の生活なのです。どれ一つとして、生きていくために不要な要素はありません。つまり、当時の人々は日々の自分たちの暮らしに一生懸命だったのです。しかし、何かが欠けていた。それは、神を思う心です。神と交わり、神に従い、御心を行なうという、最重要な宗教生活が欠けていたのです。そして、ノアのメッセージを聞こうとする耳も持ち合わせてはいませんでした。これが決定的な運命を彼らにもたらした。心の備えなきままに、まったくの無防備な状態で審きの日を迎えてしまったのです。彼らは「神の義」をもってはいなかった。ただ身の周りの事柄にあくせくと生きているだけの毎日であった。

どうでしょう。多くの人間の人生とはそういうものではないでしょうか。神の審きなんてことを語れば、そんな悲観的な話は聞きたくないと言われるかも知れません。「宗教でもって俺たちを恐怖に陥れるつもりか」と。しかし、そもそも世の終わりの審きについて語ることは、極めて積極的な生き方をもたらすはずなのです。自分に人生を与えてくださった神に仕え、神と共に歩み、倫理的な生活を営む。終末と倫理とは深く結びついている。神なしに生きるところには、放縦が生まれるでしょう。

洪水は突如として訪れました。しかし、全くの突如ではありません。予告はあったのです。ノアの口を通して語られてきた「備えよ」というメッセージがあり、箱舟を作るノアの行動自体に警告が含まれていました。主イエスの再臨もまた、突如として訪れるでしょう。しかし、主はそれに先立つ前兆の数々を語ってこられました。怖いのは、私たちの耳が聞き慣れてしまうこと、私たちの目が見慣れてしまうことです。前兆を見ているのに、それを前兆と思わなくなってしまうことです。

本論２．二人の人の譬

そのとき、畑にふたりいると、ひとりは取られ、ひとりは残されます。ふたりの女が臼をひいていると、ひとりは取られ、ひとりは残されます。だから、目をさましていなさい。あなたがたは、自分の主がいつ来られるか、知らないからです。（24:40-42）

第二の譬は「二人の人」にまつわる話です。まず、畑にいる労働者が例に挙げられる。これはどんな仕事に置き換えてもよいでしょう。地上では条件がまったく同じだった二人の人に、正反対の運命が訪れる。この二人の人は非常に緊密な仲かも知れません。仕事上の同志であり、誰よりも自分のことを分かってくれている存在かも知れない。しかし、再臨の日にはどんなに固い絆で結ばれた人であっても、分離され得るのです。一人は「取られ」、つまり天に引き上げられ、もう一人は地に残される。この両者を分けるものは何か。それは、用意ができているか否かです。主の再臨に備えて生きていたかどうか、ただその一点であります。

次に、臼を挽く二人の女性について。これも意味としては何も変わりません。当時、麦を石臼で挽いて粉にするのは女性の一般的な仕事でした。一緒に力を合わせて働いていた二人のうち、一人は天に引き上げられ、一人は地に残される。あっという間の出来事であり、人はその時何の言い逃れも「待った」をかけることもできません。そして、自分がどういう人生を歩んできたかを悟るのです。神と共に歩んだか、神なしの人生を選んできたか。

主は「目をさましていなさい」と言われます。これは、霊的に目覚めていること。常に再臨に備えていることです。ここで使われている言葉は「見張る」「監視する」というニュアンスであり、高台から危険がやってこないかどうかをジッと見続けるイメージがあります。世の中の動きをよく見て、終末の前兆と思われる出来事に敏感でなくてはならない。また、自分自身をよく見つめ、神に喜ばれる生き方をしているかどうかを常に監視していなくてはなりません。更に、自分に与えられた責任をきちんと果たしているかどうかも問われてくることになる。次回扱う 45 節以下では、主人に仕事を任されたしもべの譬が語られていきますが、ある人はいつ主人が戻ってきてもいいように忠実に働いていたが、別の人は主人がいないのをいいことに好き放題やっていた。そして、両者にはまったく違った結末が訪れるというストーリーです。25 章に入ると、花婿を待つ 10 人の乙女の譬（25:1-13）、タラントの譬（25:14-30）、羊と山羊の譬（あるいは「寓話」「直喩」と言った方が適／25:31-46）と三つの譬話が出てきますが、これらはいずれも「主の再臨に備えよ」「生き方に気をつけよ」というテーマの上にあります。

本論３．泥棒の譬

しかし、このことは知っておきなさい。家の主人は、どろぼうが夜の何時に来ると知っていたら、目を見張っていたでしょうし、また、おめおめと自分の家に押し入られはしなかったでしょう。だから、あなたがたも用心していなさい。なぜなら、人の子は、思いがけない時に来るのですから。（24:43-44）

三つ目の譬は「泥棒」に関するものです。私たちもよく知っているように、泥棒というのは公然とは盗みを行ないません。人がいない時を見計らって行動するのです。いつ盗みに入るかをご丁寧に教えてくれる泥棒はいないでしょう。まさに寝首を掻くかのように、不意打ちを喰らわす。新約聖書の随所で、再臨は盗人のようにやってくることが語られています（Ⅰテサロニケ5:2-6、Ⅱペテロ3:10、黙示録3:3、16:15）。

私たちには、主の日がいつであるかが知らされていません。このことは、捉え方によっては不親切に感じられるかも知れない。しかし、もし何年何月何日と伝えられていたとしたら、人はどのように生きることになるでしょうか。恐らく、その日が接近するまでいい加減に生きるようになるでしょう。そして、その日が目前に迫ったら心を改めればよいと思うのではありませんか。再臨の日が伝えられないということは、継続的な準備状態が求められているということです。それこそが信仰者にできることであって、私たちにとっての最も安全な生き方なのです。

しかしながら、自分では霊的に目覚めていると思っていても、実は眠りこけているということがあり得る。主イエスの弟子たちも、ゲッセマネの園で主が血の汗を流して祈っておられる時に、繰り返し「目覚めておれ」と言われていたにも拘らず、眠りこけてしまいました（26:36-46）。

旧約聖書を読みましても、イスラエルの宗教家も国家も霊的に眠り込み、神の民とは程遠い歩みをしていました。神殿での儀式は形骸化し、祭司の務めは形ばかりのものとなっていった。罪を犯しても犠牲の動物さえ献げればどうにかなると、罪を軽く見て、神を侮る生活が蔓延ったのです。そういう中にあって、絶えず警告を発し続けたのが預言者でした。彼らは迫害されながらも、神の声に耳を傾け、民に伝え続けたのです。

形だけ「罪の赦しの犠牲」を献げるという行為は、教会史においてローマ・カトリック教会が陥った「免償符」というものとよく似ています。お金さえ払えば罪の赦しが得られるという考えは、教会の罪認識をどこまでも薄め、神への畏れを奪い去りました。しかし、この時にも目を覚ましていた人々がいました。宗教改革者たちです。彼らは真の宗教を追い求め、聖書の真理に立ち続けたのです。

【結論】

私たちにとって「目を覚ましている」とはどういうことか、今日も確認をしておきましょう。
①世の中の動きをよく見て、終末の前兆と思われる出来事に敏感でなくてはならない。
②自分自身をよく見つめ、神に喜ばれる生き方を志す。
③自分に与えられた責任を果たし続ける。
霊的な眠りというのは、じわじわと私たちを取り巻きます。良心の声を無視し続けるときに、私たちの耳は塞がれていくでしょう。世界に起き始めている終末的現象を見ても何も感じなくなるところにも危険があります。自分の行なっている仕事が形ばかりのものとなっていたとしたら、それは気づかぬうちに陥っている「眠り」かも知れません。私たちは今日主イエスが来られてもいいように、御霊に属する生き方を志したいと思うのです。この生き方は律法主義の対局にある神との生き生きとした関係であり、人生の終わりまで継続されるべきものであります。

【祈り】

私たちの人生の主、歴史の主であられる天の父なる神様。今日も「目醒めていなさい」という主イエスの御声を聞きました。なぜそんなにも繰り返し言われなくてはならないのでしょうか。それは、私たちが眠りやすいからです。この世が常に眠りに誘い込んでいるからです。今起きている事柄を見分け、自己を吟味する目をお与えください。いつも平安であり、且つ神と交わり続ける歩みができるように。主イエスとお会いする日を心から待ち望ませてください。

【祝宣】

仰ぎ願わくは、
いつの時代にも人類に警告を与え、人の心をご自身に向けさせ給う、父なる神の愛。
世の終わりの出来事を示し、継続的な備えをさせ給う、主イエス・キリストの恵み。
日々、神との交わりのうちに一日を始め、祈りをもってその日を終えさせ給う、聖霊の親しき交わりが、
我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。